大阪経大論集・第六九巻第二号・二〇一八年七月

構造主義思考モデルからの脱却について

鈴木隆芳

序

人口学者エマニュエル・トッドは『家族システムの起源』[1]において、それまでの方法論を大きく転換した。家族類型の分類において、従来の共時的な構造主義のモデルから脱却し、それぞれのカテゴリーの起源について史的に考察したのである。こうしたトッドの思想の転換の意義を形而上学の域で問題にしたいと思うのだが、そのことについて直接に述べる前に、トッドの家族類型が構造主義のモデルに倣っていた、という事実についてまずは示しておきたい。トッドの家族類型の主要な部分は次の四つのカテゴリーからなっている。

	親との関係	兄弟（姉妹）間の関係
絶対核家族	自由	不平等
平等主義核家族	自由	平等
直系家族	権威的	不平等
共同体家族	権威的	平等

相続や両親との同居の様態から導かれる「親との関係」「兄弟（姉妹）間の関係」といった概念は、「自由」「権威的」「平等」「不平等」といった弁別特徴を従えることで、各々のカテゴリーを排他的に定義する基準となっている。トッドによれば、こうした家族類型は、共同体にとっての「下意識」として働き、当の社会が行う政治、経済、教育などに関する意思決定の局面において顕在化するという。例えば、英国のEU離脱や、トランプ政権の急激な方針転換も、親との関係が「自由」で、伝統に対して淡白であり、前の世代が決めたことに執着しないアングロ・サクソンの「絶対核家族」の属性から説明がつく。一方、親との関係が「権威的」な直系家族の日本やドイツの場合には、伝統の継承を重んじることから、教育の水準が高く、上意下達の組織形態が功を奏す製造業などに強みを発揮する。こうしたトッドの家族システムによる共同体イデオロギーの分析には、一応の説得力があるように思える。ただ、ここで注目したいのは、こうした家族類

型の特質やその妥当性ではなく、トッドがこうしたカテゴリーの汎時性や共時性といったものを棄てて、各々のカテゴリーの発生と変化を史的に考えるに至ったという思想上の転換の意義についてである。

その直接の経緯についてトッドは次のように言っている。

なぜ、核家族は、〔近代イングランドのような〕複雑な社会システムと未開の共同体とに同時に対応し得るのかということを理解しようとすると、われわれは構造主義の公理から脱却しなければならなくなる。もっとも、経験的事実への服従という原則からすれば、われわれには選択の余地はないのだ。もし同じ要素が異なる構造、対立しさえする構造に組み込まれることがあるとするなら、社会というものはあらゆる点で首尾一貫しているわけではないということになる。社会生活の要素のなかには、他の要素からは独立して存在し得るものがあるのであり、そうした要素の変動を支配する法則は、特殊なものであるかもしれないのだ。(2)（傍点、鈴木）

ヨーロッパ人の近代性の特徴であるはずの核家族が、なぜ各地の「未開人」にも見られるのか。たまたまの偶然なのか。構造主義が旨とする共時的思考モデルをもって、こうした経験的事実を解釈することはできない。さらには、かつてエンゲルスが示したような、集団婚を起源とする憶測にもとづいた推察も、これが核家族の先進性を前提としたものであるだけにやはり役に立たない。(3)核家族の世界地図上での離散的分布を説明するための原理は、構造主義的モデルでもなければ、進化主義的モデルでもないのだ。

以下では、こうし共時的な構造主義的モデルの思考様式が及ぶ射程を示しつつ、そこからの脱却の方法を実践例を通じて探ってみたい。

一　構造主義モデルと共時体系

時間を捨象した共時体系内で、ある項が存在するためには、その項と他の項の間に弁別特徴となる差異が必要になる。冒頭の例で言えば、絶対核家族と平等主義核家族の差異は、兄弟姉妹間の関係が平等であるか否かであった。かつての構造主義にのっとった言い方をするなら、各々の項は先験的に存在するのではなく、差異が存在した後に、その差異が項を存在せしめる、と言うべきなのだろう。こうした思考様式が由来する源には、ヤコブソン、トゥルベツコイらが樹立したプラハ学派の音韻論があるが、この学問の中枢にあるのは、音素の弁別特徴による対立原理である。実際に発される言語音は、無数の特徴や個性を含み、そのままでは体系内での要素として分類することはできない。そこから他要素との差異をなす特徴のみを抽出し、他の個性を退けた時にはじめて、その音は音素として、示差的な言語音となるのである。トゥルベツコイはその原理についてこう述べている。

発声行為の過程で産出、知覚される個々の音には、音韻論上の示差的な個性だけではなく、その他の多くの個性がある。したがって、こうした音が音素であるとは言えない。ただ、そうした音のひとつが、特定の一音素の音韻論的特徴すべてを含んでいるという意味においては、それは、音素の実現したものであると言える。発声行為によって生じた言語の音それじたいが音素になることは決してない。音素というものは音韻論上示差的な特徴以外のいかなるものも含まないからである。実際に発された言語の音には、そんなことは言えない。言語中に現れる具体的な音の方こそが、むしろ音素の単なる物質的象徴と言うべきた。(4)

例えば、音素/p/と/b/が対立する場合に、そこで弁別特徴となるのは「有声性」の有無である。一方、/p/と/m/の場合では「鼻音性」の有無が弁別特徴をなす。

	有声性	鼻音性
/p/	−	−
/b/	＋	−
/m/	＋	＋

音素/p/は、物質的な支えをもってはじめて顕在化するという意味において抽象の水準にあるとも言えるが、意味の認識に直接関わるという意味においては、音素こそが具体物なのだ、と主張することもできる。後者の主張にしたがえば、/p/と/b/を聞き分ける耳があって、はじめてpig「豚」とbig「大きい」が異なる意味を持つことを認識できるという考えにゆきつく。ここでは音素とは「音の聞き方」を強いる認識装置なのである。音韻論を祖とする構造主義が、一般にエピステモロジー（認識論）と呼ばれる所以は、それが、私たちにある一定の世界の認識方法を強いるからである。

音韻論の領域で成功を収めたこうした思想は、やがて多くの事象に適用されるようになる。ヤコブソンの講演集の冒頭にレヴィ＝ストロースが寄せている序文は、その事情をよく物語っている。

> 構造言語学が私に教えてくれたのは、多様な諸項にまどわされることなく、それら諸項を結び合わせている、より単純な、より理解しやすい関係を考察することが重要である、ということである。〔…〕今日、歳月の経過とともに、私には、きわめて強い感銘を受けたこれらの講義の主題がかつてないほどよくわかる。音素、近親婚の禁止といった概念がどれほど混質的であったとしても、私が後者についていだくようになった考え方は、言語学者が前者（音素）に与えた役割から着想を得ている。(5)

従来の人類学が重視してきた風俗、遺伝、モラルなどは、

共同体ごとの個性に大きく左右され、そのどれもが禁忌を説明する基準とはなりえない。そこで、レヴィ＝ストロースは、婚姻にまつわる「混質的」な現実が、女性の贈与・返礼をめぐる反対給付の有無といった弁別特徴によって体系化できると考えた(6)。

レヴィ＝ストロースが述懐するように、構造主義はその原理の純粋性を構造言語学の音韻論に負っている。弁別特徴による体系化は、音素にとどまることなく、他の事象にも及び、言語学においては、音素よりも規模の大きい単位である語や、心的事象の意味までもが体系的に分類できるであろうと言語学者は、考えるようになった。グレマスが『構造意味論』で示した例は、そうした構造言語学の原理の拡張的性質を示している。「表意作用は関係の存在を前提としている(7)」と考えたグレマスに従えば、garçon「少年」・fille「少女」は、「男性性」という弁別特徴の有無によって対立するということになる。

ただ、少し考えてみると、こうした体系化は、語彙の一定の表意水準においては上手くいくが、実際のところ、言語の意味はそうした一元的な体系化を拒絶することが多くあることが見えてくる。例えば homme「人間」と animal「動物」が、「人間性」の有無において対立するとした場合でも、その一方で L'homme est un animal.「人も動物なのよ」「オトコってケダモノね」というように homme=animal が成立してしまう。これは homme≠animal の対立をいったん受け入れながらも、それを高次のレベルで解消し、含蓄に富む言述が生じる例である(8)。つまり、差異にもとづく共時的な体系原理は、意味を扱う心的事象には適用が難しいのだ。この例は、構造言語学の及ぶ域の限界を示している。いったい、どのような場合に、私たちは構造主義の思考モデルを諦めなければならないのだろうか。

二　止揚のひとつの可能性——時間性

ソシュールは構造主義の先駆者と言われる(9)。「先駆者」とは必ずしも褒め言葉というわけではなく、後の構造主義者の目から見た場合には、彼の説く原理には不備があることをやや皮肉った表現とも言える。「言語分析においてトゥルベツコイとプラハ学派が音素体系の構築において、その意義を見出すまでは、ソシュールの考えは生産的ではなかった(10)」というジョルジュ・ムーナンの言葉にあるように、ソシュールの、とりわけ言語音についての彼の学説は、そのままでは構造言語学を体現しているとは言えないものであった。

しかし、こうした構造主義者の評価を保留しつつ、私たちは問わねばなるまい。ソシュールの言語音分析に見られる「未完成」や「不備」は、ほんとうに彼の学説の未熟さに由来するものであったのだろうか、と。そして、さらには、彼の思想は、構造主義的なものの考え方の限界や、そこからの脱却の可能性を示唆してはいまいか、と。

ヤコブソンがソシュールの音声学を批判するのは、ソシュー

ルが単位として扱う音が、純粋に示差的な弁別特徴の水準に達していないことにある。

（ソシュールにおいては）等質的な聴覚時間に対応する調音時間が単位とみなされている。聴覚時間の等質性こそが、それに対応する調音時間を単位として考える支えになっているのである。これこそが発声単位である。これは時間における単位であり、同時に、時間における等質的なもの、約元不能なものなのである。こうした事象は、継起性の軸上の話であって、同時性の軸上の発声行為および音素の等質性や還元不可能性についてはなんの解決にもなっていない。したがってソシュールが持ち出した事象は、いかなる場合においても、シニフィアンの線上性を支持するものでもなければ、弁別特徴の累積を否定するものでもない。

ソシュールが「ひとつの音」と考えたのは、等質的印象からなる時間のことである。「まずはじめに大切なことは、ひと続きの言葉を等質的時間に分類することである。[11]」すなわち、彼の単位には時間としての持続が含まれているのである。後の構造言語学の音韻論者は、こうした実質を捨象できていないソシュールの音声学を批判した。音素は純粋な差異からなるのであって、それは抽象的かつ潜在的な単位でなければならない。さらに、その音素は、話者の口から発された時にはじめて言連鎖の中で持続を占めるのだ、と音韻論者は考えた。

時間とはなにか？　なぜ、ソシュールは音単位が持続を伴うという考えを持ち続けたのだろか。

ソシュールの経歴に目をやると、彼が言語一般の性質を考えた期間が比較的限られていたことがわかる。[12]事実、ソシュールが言語学者としてはじめて名をあげたのも、歴史比較言語学の分野であり、そうした彼が音の単位なり同一性 identité なりをどう考えていたのかは考慮に価する。共時態においては、音単位の同一性は、個々の音素の弁別特徴であると見なしてなんの不都合もない。pig「豚」の /p/ の無声を有声にすれば、得られるのは big「大きな」であり、結果、/p/・/b/ の双方ともが音素としての資格を得ることになる。ところが一方で、史的変化を扱う通時態においては、こうした操作は成立しない。次のようなソシュールの言い方に注目してみたい。

例えば、salter ＞ sauter（という変化）を定式化するなら、「子音の前の l は u になる」と言うことになろう。事実、saler は saler のままであるから。この定式化の結果、分類は誤ったものになる。［…］正しい定式は「内破 implosion の l は子音の前で u になる」である。[13]

内破 implosion とは、音節内で音素が示す「閉じた音の印象」のことである。salter の l のステータスを「子音の前に

あるl」と見なすことは誤りで、このlの同一性は、salという音節の末尾音であることからきている。pigやbigならば共時的な表意体系において、意味が「音」の基盤となりえよう。だが、意味という基盤を欠いた通時態において、lの同一性は何にもとづけば良いのだろう。そうした問いを経て、ソシュールは、時間的な持続を含む音単位である音節こそが同一性の基盤であると考えるに至ったのである。

> 確認しておかなければならないことがある。それは歴史上の音声変化の大半は、言葉それぞれの変化よりも、音節という不可欠の枠組みにおいて生じる諸要素の状況、つまり諸言語に共通した事象によって決まってくるということだ。したがって、言語学の益を考えるのなら、音カテゴリーの微細な区分こそが真実をもたらし、これが自らの要請に応えるものだと思いこんでいる音声学者を支持することなどとてもできない。(14)

引用後半は、あたかも後世の構造言語学者に向けた警句であるかのような感さえある。時間を捨象した音素が機能するのは、共時態という時間を欠いた話者の言語意識があってこその話であって、汎時的な話者のいない史的な環境においてはまったく事情が異なる。時間上での生成という渦中において同一性を求めるのであれば、そこには持続を含む単位が必要になる。

こうしたソシュールの言語音についての思索を取り上げることで、私たちは、構造主義の思想を止揚するひとつの実例を目撃したことになる。構造主義の思考モデルは、なにも構造主義に限った話ではなく、今でも、無時間的環境の中で分類や体系を扱う際の常套手段であり続けている。だが、一方で、そうした体系の起源、発生、変化などを問う場合には、構造主義のモデルは役に立たない。冒頭で引いたように、エマニュエル・トッドが家族システムの起源を問うにあたって構造主義とは異なる方法を採ったのは、こうした理由からである。トッドが「古代的核家族（アルカイック）」という大胆な発想に至ったのも、彼が体系の共時性と決別したからこそである。(15)

三　止揚のもうひとつの可能性――他者性

構造主義の思想モデルが示すもうひとつの特性とそこからの脱却の可能性を考えるにあたっては、次のポール・リクールの言葉がヒントになる。

> 記号の総体は、これを分析に服せしめるためには、一つの完結な体系とみなされなければならない。このことは、音韻論の水準においては明らかである。音韻論とは、一定の言語のもつ種々の音素の有限的な目録を作成するものだからである。(16)

音韻論において音素の体系化は、体系内での項の個数の有

限性を前提としている。実際、ひとつの言語において、示差的機能を持つ音素の数は、おおよそ20～30個程度であり、音素の数はすべてを枚挙できるほどに留まる。こうした有限性、しかも数えられる範囲での有限性が体系が成功するための条件なのである。その証拠に、音素に比べて圧倒的に数の多い「語」のレベルになると、「語」が示差的な対立要素からなる体系をなしているとは断言できない。先のグレマスの例で見たように、「少年」と「少女」は、辞書のレベルでは「男性性」という弁別特徴によって対立しているように見えるが、「少年」「少女」という語彙には、少し考えただけでも「男性性」の有無に還元しきれない意味があることがわかる。「少年老いやすく学成り難し」における「少年」は、「男性性」を弁別特徴として「少女」と対立していると言い切れるだろうか。

体系化に抗うこうした傾向は、語よりも大きな規模の言述のレベルになるとさらに著しくなる。『マルクス主義と言語哲学』の著者バフチンは、言述の水準にある言語の性質について述べるにあたって、「交通」という概念を用いて、静態的な体系の外部を志向している。

> 言語が生き歴史的に生成してゆくのは、まさにここ、具体的な言語的交通のなかであって、言語諸形態の抽象的言語学的体系のなかや話し手たちの個人心理のなかにおいてではない。(17)

バフチンの言う「交通」とは、言語というものが、常に社会における経済、政治、文学といった現実の言葉のやり取りの場において、他者によって撹乱されたものであることを意味している。主体が語る言葉には、常に「間接話法」が含まれていて、そこには主体の純粋性や排他性もなく、むしろ、言語主体といったものが、絶えざる社会との交渉によって弁証法的に形成されると彼は考えたのである。こうしたバフチンの考えは、構造言語学のモデルを窮地に追い込む。そこには同一性が確保された言語主体などはなく、不断に他者が介入している。たとえば、フーコーの「言表主体は異なる個人によって満たされうる空虚な場所である。(18)」という言葉は、それまでの言語学が謳歌していた言語主体の称揚に冷水を浴びせかけた。純然たる内部もなければ、完全なる外部もない。浸透し合う薄膜によって、どうにか隔てられただけの主体がかろうじて同一性を自称している。ここにあるのは、音韻論の共時的体系にあるような、体系全体を俯瞰し、構成要素をくまなく把握するような崇高な主体ではなく、どこまでが自らの域なのかすらわからないような曖昧な主体、すなわち、最も主体的ではない主体である。そうした固有名に帰すことのできない主体こそが言述の主体となっているのだ。「私はいったいだれの言葉を話しているだろう?」という自問は、こうした言語主体のまっとうな意識の現れなのである。

結論

構造主義は、限られた範囲における体系化については、きわめて有効な思考モデルとなる。混質的かつ多様な世界が、一定数の対立し合う弁別特徴に還元される概念象にはある種の爽快感や全能感がともなう。そうしたところに、この思想モデルが一世を風靡した理由もあると言えるだろう。静態的な体系分析の主体が、自らの存在理由についてもっともらしく過不足のない説明を行うのは、そうした主体が体系の内部にあり、体系の原理と分離し難く混じり合っているからである。一方で、そこで扱う事象が、変化や生成といった時間性や、外部や社会といった他者性を本性とする場合には、構造主義の思考モデルはどうにもうまくいかない。主体や同一性が確立できない環境において、この思想は現実の矮小化をもたらすのである。

注

（1）エマニュエル・トッド『家族システムの起源Ⅰ ユーラシア（上）』石崎晴己監訳、藤原書店、二〇一六年。Emmanuel Todd, *L'Origine des systèmes familiaux*, Tome 1. L'Eurasie, Gallimard, 2011.

（2）同書一九頁。*Ibid.*, Todd, pp.22-23.

（3）エンゲルスが集団婚について述べたくだりを引いておく。「歴史のうえで議論の余地なく立証でき、かつ今日でも諸々方々で研究できる最古のもっとも本源的な家族形態としてわれわれがみいだすものは、実際はどのようなものか？集団婚、すなわち、男子の全集団と女子の全集団とが互いに相手を所有しあっていて、ほとんど嫉妬の余地を残さない形態である。」（エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』土屋保男訳、新日本出版社、一九九七年、五一頁。

（4）N.S. Troubetzkoy, *Principes de Phonologies*, 1976 (1938), Klincksieck, Paris. p.40.

（5）Préface écrite par Claude Lévi=Strauss in Roman Jakobson, *Six leçons sur le son et le sens*, 1976, Minuit, p.8. レヴィ＝ストロースによる序文。ロマン・ヤコブソン『音と意味についての六章』花輪光訳、みすず書房、二〇〇八（一九九七）年、一二頁。

（6）クロード・レヴィ＝ストロース『構造人類学』荒川幾男他訳、みすず書房、一九七二年。並びに、クロード・レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』馬渕東一他訳、番町書房、一九七八年。

（7）グレマス『構造意味論』田島宏他訳、紀伊国屋書店、一九八八年。六七頁までの原理に関する説明部分を主に参照。

（8）鈴木隆芳「言語学はなにを得て、なにを失ったのか」『跡見学園女子大学文学部紀要』第四四号、二〇一〇年、二一頁。

（9）例えばG・ムーナン『ソシュール　構造主義の原点』福井芳男他訳、大修館書店、一九七〇年。Georges Mounin, *Ferdinand de Saussure ou le structuraliste sans le savoir*, Paris, Seghers, 1968. この原書副題 sans le savoir の意味するところは「自覚なき構造主義者」である。

（10）*Ibid.*, p.66.

（11）Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*,

Premier et troisième cours d'après les notes de Riedlinger et Constantin, texte établi par Eisuke Komatsu, Collection Recherches Université Gakusyuin 24, 1993, p. 25.

（12）互盛男『フェルディナン・ド・ソシュール　言語学の孤独、「一般言語学」の夢』、作品社、二〇〇九年。巻末の参考資料を参照。

（13）Saussure, *op. cit.*, pp. 51–52.

（14）Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale, édition critique par Rudolf Engler*, fascicule 1–4, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1967–1974. N14c, 3305, 4.

（15）古代的核家族を原初的家族形態と考えたトッドは、そこから時代を経ることで、直系家族が現れ、その後に最も規模の大きい共同体家族が生じたと考えた。こうしたトッドの考えは、核家族に西欧の先進性を見ていたそれまでの多くの説へのセンセーショナルなアンチ・テーゼとなっている。

（16）ポール・リクール「構造、言葉、出来事――構造主義と言語学」、ドムナック編『構造主義とは何か』所収、平凡社、二〇〇四年、二八〇頁。

（17）バフチン『マルクス主義と言語哲学　言語学における社会学的方法の基本的問題』桑野隆訳、未来社、一九八九年、一四七頁。

（18）Michel Foucault, *L'Archéologie du savoir*, Gallimard, 1969, pp. 105–115. 〃シェル・フーコー『知の考古学』慎改康之訳、河出書房、二〇一二年、一四九―一六四頁。